

<様式2> 総合農業技術センター試験・研究課題事前評価表

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：普通作物管理技術の改良（S45～）

小課題名：水稲における高温登熟障害軽減化技術の確立（H24～27）

担当者名：石井利幸、上野直也、長坂克彦

評価項目	評価点	指摘事項
1 課題設定の必要性 (背景、社会的ニーズ)	5 / 5	高温登熟障害が全国的に問題となる中、当県でも胴割米等の登熟障害が多発し、生産現場からのニーズは高い。課題設定は的確である。
2 課題の新規性、独創性	4 / 5	全国的に研究が進められている課題であるが、当県で発生する登熟障害の特徴と対策に関し、機作の解明も含めて新規性を期待したい。
3 目的・内容の整合性、妥当性	5 / 5	当県で発生した一等米比率の大幅な低下の原因である高温登熟障害の対策技術を確立する研究の目的・内容の整合性・妥当性は高い。
4 研究手法の的確性、技術的可能性	4 / 5	当県で発生する高温登熟障害の症状に適した対策をとれるよう、試験内容を十分検討して進めてほしい。
5 成果の期待度	4 / 5	既往の研究成果を十分活用し、さらに当県で発生する主要な障害の症状に集中して取り組むことによって、障害の発生が抑制され、高品質米の安定生産が図られるよう期待したい。
総合評価	4 / 5	高温登熟障害による米の品質低下は、生産現場において極めて大きな問題である。これは、全国的にも問題となっていることから、独立行政法人や他県の成果を活用あるいは連携し、中途でも情報発信するなど対策を急いでほしい。

「注」 評価点の目安

評価	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
点数	5	4	3	2	1

試験研究機関の処置

これまで高い評価を得てきた本県産米の品質を維持するため、関係機関や他の研究機関と連携を図り、既往の研究成果を活用しながら、本県における主な障害である胴割米の軽減化対策を確立したい。また、得られた単年度の成果を順次公表することにより対策の迅速な確立を図り、県産米の安定生産に寄与したい。

＜様式4＞総合農業技術センター試験・研究課題中間評価表

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名：

大課題名：野菜・花きのオリジナル品種育成と栽培技術の確立

小課題名：小型コチョウランの新品種育成と栽培技術

担当者名：窪田浩一、藤木俊也、加藤成二

評価項目	評価点	指摘事項
1 研究の進捗度	5 / 5	短期間で3品種の開発は大きな成果である。さらに3系統について系統適応性試験を実施中であり、研究の進捗度は高い。
2 研究内容の妥当性	5 / 5	コチョウランは当県の花きの主要品目であるが、とくに大輪系については市況が低迷していることから、小型コチョウランの新品種育成を目指した研究内容の妥当性は高い。
3 研究成果の期待度	5 / 5	品種登録した3品種の栽培期間はいずれも約1年と短く、栽培面積も小さく低コスト化が図れるなど生産側のニーズと合致しており、研究成果の期待度は高い。花卉栽培農家の新たな活路として期待される。
4 研究継続の必要性	5 / 5	研究は順調に進展しており、さらに多くの特徴あるオリジナル品種の開発が必要であるので、継続してほしい。登録品種の栽培特性の解明も進んでおり、研究継続の必要性は高い。
総合評価	5 / 5	背景・目的に合致した研究成果が得られており、総合的に見て評価は高い。やまなしブランドとしての評価を高めるためには、さらに多くの優秀な品種を開発し、栽培マニュアルを確立するとともに、さらに積極的な宣伝活動も重要である。

「注」 評価点の目安

評価	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
点数	5	4	3	2	1

試験研究機関の処置

小型コチョウランのやまなしブランド確立のため、継続して交配・変異処理による品種育成をすすめる。開発した品種の普及にあたっては、現地実証を重ねながら栽培マニュアルを確立していきたい。また、関係機関や生産者団体と連携して宣伝・販売を積極的に進めていく。

＜様式4＞総合農業技術センター試験・研究課題中間評価表

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名：

大課題名：耕地の地力変動に関する調査

小課題名：県内主要土壌の地力の推移と変化要因の把握

担当者名：望月久美子、山崎修平、長坂克彦

評価項目	評価点	指摘事項
1 研究の進捗度	5 / 5	県内農耕地の主要土壌に120ヶ所の調査地点を設置し、4年サイクルで土壌管理状況と土壌理化学性の調査を行うなど、計画どおり進められている。その結果、県内農耕地におけるリン酸、加里蓄積の現状が成果情報にまとめられており、研究の進捗度は高い。
2 研究内容の妥当性	4 / 5	地道で根気の必要な課題であるが、土壌管理や施肥技術の基盤となる重要な研究であり、研究内容は妥当である。
3 研究成果の期待度	4 / 5	本研究の成果は、土壌管理技術や施肥技術の改善・開発の基礎となるもので重要であるが、この成果が生産現場の技術にどうつながるのか、わかりやすく示す工夫が必要である。
4 研究継続の必要性	5 / 5	本研究は、地点数が多く調査・分析に多大な労力がかかる調査であるが、これは継続してこそ意味がある基盤研究であり、継続の必要性は極めて高い。
総合評価	4 / 5	県内農耕地の代表的な土壌について長年継続して実施している定点調査のデータは、極めて貴重である。また、土壌の物理性変化や微量元素の動態等も含めて幅広く解析し、生産に活用可能な情報を発信できるよう期待する。

「注」 評価点の目安

評価	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
点数	5	4	3	2	1

試験研究機関の処置

基盤研究としての価値を発揮できるよう、長期間に亘る土壌の化学性・物理性の変動を解析し、作物生産に有用な成果としてとりまとめ、生産現場にわかりやすく情報提供していきたい。また、研究の中で明らかになった土壌管理上の課題については、必要に応じて新規課題を立て、土壌管理の適正化に取り組んでいきたい。

